

解題 『カッツェンベルガー博士の湯治旅行』（一八〇九年）

恒吉, 法海
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/9911>

出版情報 : ジャン・パウル中短編集 II, pp.521-537, 2007-04-25. Kyushu-University-Press
バージョン :
権利関係 :

解題 『カツェンベルガー博士の湯治旅行』(一八〇九年)

恒吉法海

ジャン・パウルの『カツェンベルガーの湯治旅行』は様々な付録が付いて出版されているが、まず物語としてまとまった湯治旅行の部分について紹介したい。湯治旅行の物語はジャン・パウルの作品としては比較的まとまったもので粗筋も書きやすいものである。解剖学者のカツェンベルガーは一人娘のテーオダを連れてマウルブロンへの湯治旅行の計画を立て、割り勘での馬車での同行者を求める新聞広告を出す。しかしドクトルが旅行に出掛けるのは湯治のためではなく、自分の論考に対する書評家をぶんなぐるためであり、さらには名親依頼を避けるためである。同行者にトイドバッハという著名の劇作家がフォン・ニースという本名で現れる。娘のテーオダはトイドバッハのファンで手紙を出していたのであった。道中奇形好きのドクトルは八本の足を持つ兎をせしめる。フォン・ニースはトイドバッハの話をしてテーオダの心をつかもうとするが、フォン・ニースの実体は騎士的ではなく、作品のイメージと違いテーオダはフォン・ニースが嫌いになる。マウルブロンに着いてフォン・ニースが自作を朗詠して、盛り上がったところで自分は他ならぬトイドバッハであると告白したそのとき、数学者、測量士の同名のトイドバッハが口を挿み、自分がトイドバッハであると名乗り、テーオダもその通りと保証して朗詠の場面は終わる。その後誤解が明らかになるが、テーオダはマウルブロンの洞窟で数学者のトイドバッハの心を得て一緒に帰ることになる。その間ドクトルは湯治の食卓で解剖学者らしい話をしてレディーの鬢髻を買うが、書評家を酔ったふりをして追いつめ、書評家が秘蔵の六本指の手を差し出すに至ってこれを許すことになる。結局ドクトルは名親の依頼を受け入れ、自分の領地に熊の骨等の残る洞窟を有する数学者のトイドバッハと娘との結婚を承諾する。

ジャン・パウルの語りは啓蒙的なものであることを特徴としているが、これはそう単純なものではない。例えば公の場から遠ざかっていたテーオダが最後の食卓の場に現れるとき作者は次のような様々な理由を挙げている。単純に主な理由を一つ挙げる流儀ではないのである。実際に動機を考えてみると、なんとなくという部分までも含まれるのが現実に近い。ただ現代文学ではこの理由付けが、例えばカフカの場合など因果律以外のほとんど予測のつかないものであることが多く、この点ではジャン・パウルはある共通の世界観を前提としていることになる。

「テーオダもまた公の食卓に再び姿を現した、つまりこれを最後に、関税吏にエスコートされて現れた、関税吏はこのような高貴な人を隣にすることを名誉と考え、父親の客人というよりは娘のホストという見せかけを大いに得意に思って彼女を椅子まで案内した。公の場に姿を現すという彼女の決心が単に知人に会えた喜びから来たのか、それとも彼女が隣に座らなければただ冷たい父親の隣にいるしかないメールホルンに対する敬意から来たのか、分からない。 — あるいは旅立つという考えから、そして旧来の自負心の目覚めから来たのか — それとも(誰にも分からないことであろうが)初めて食卓で侯爵という人を見てみたいという願望からか、それとも最後に大尉トイドバッハを見てみたいとまで願ったのか、それとも夕方照明される楽園の洞窟への見込みから来たのか分からない。

— あるいは未知の理由からかもしれない。申し上げると、かくも多くの理由のうちのどれが彼女の変化をもたらしたのかはなはだ不分明である。私に証明できることは、多分こうした理由のすべてが一緒になって — すべての明らかでない理由も含めて — 影

響を与えたのであろうということである」(以下引用はハンザー版、Bd.6 S.271)。

カッツェンベルガーといえはそのシニシズムが問題となるが、ジャン・パウル自身その説明を序言でしている。これも色々あげて説明している。

「ともあれ四種類のシニシズムがある。第一のは性に関する粗野なシニシズムであり、アリストファネスやラブレー、フィシャルト、総じて純潔ではあるが古代のドイツ人や医師達が有している類のものである。これは人倫に対するというよりは趣味や時代に対して向けられたものである。

論理学が採用する第二のシニシズムはフランス人達の繊細なシニシズムで、これは古代の神学者達の繊細な殺人や盗みに似て、優しく微妙な不義を演ずるものである。黒い悪徳を輝く罪に描き出し、罪を隠しつつ喚起して、諷刺家として斑猫を痛みを転ずる発泡薬として塗布するのではなく、媚薬として斑猫を内服させて没落の刺激を引き起こすこの滑らかな毒蛇のシニシズム、この第二のシニシズムは、勿論銅版のように、野外に置いておくと単に緑色になるだけであるが、しかしこれは有毒であり、一方第一の重いシニシズムは鉛のように黒い色に風化する。(中略)

－ ほとんど正当化が必要となりそうだ。それ故私は第三のシニシズムに移る。

これは単に自然の、しかし性のない事物について、医者や誰でもそうするように自然に話すものである。しかしここで現今のドイツの取り澄ましや語句の小都市趣味は、私がこう伝えれば何と答えるだろうか。つまり最良のフランス人達の許でも(例えばヴォルテール)しばしば尻、けつ、小便に出くわす、売苦(笑)婦は問わずもがな、と。実際フランス人はあれこれ言い、イギリス人はそれ以上である。にもかかわらず我々ドイツ人は我々ドイツ人に対しては、次に並ぶようなイギリス人達の場合には大目に見て、享受することを我慢できない。つまりバトラーやシェークスピア、スウィフト、ポーブ、スターン、スモレットと言った人達であり、ダンとかピーター・ピンダーやその他のより小粒な者達は言うまでもない。しかしまだ決してドイツ人は、普段倫理や会話、性、社交の点に関して、また白い下着に関して繊細で慎重なイギリス人ほどに大胆に振る舞ったことがない。清潔で純潔なスウィフトはまさにこうした精神的肉体的清潔さへの愛から患者達をまことに深く自分の諷刺的泥土浴に押し込んでいる。彼の両義性は決して芽を出さない我々のコーヒー豆に似ている、我々は半分の豆しか有しないからである。しかし我々老嬢なドイツ人は考えられるかぎり奇妙極まる小都市趣味とコスモポリタンの混合である。我々は改善すべきであろう。しかしこれは難しい。我々は容易に国内の太陽の白斑よりも国外の黒点を許す。我々は<敬称略>と<失礼ながら>とをいつも駆り立て追い散らす話の両極として人々に向ける。

第四の(ひよっとしたら最良の)シニシズムは私のそれで、殊にカッツェンベルガーの湯治話ではそうである。こう結論付けるのは、このシニシズムが単にごく清潔な距離を保って上述のイギリス人達の足跡を辿り、不逞なことをほとんど、あるいは何もせず、喜劇的なものは医薬学の検閲自由へのかの接近を許し、求め、飾るという原則を常に保持しているからである、この接近は当然ながらこの医師の湯治話においては欠かすことが出来ない。すでにレッシングがその『ラオコーン』で喜劇的反吐の出るものを(反吐の出る喜劇的なものは勿論別物であるが)根拠や例を挙げて擁護している、例えば上品なチェスタフィールド卿のホッテントットの化粧室の馬小屋作品、台所作品からそうしている」(S.82f.)

ジャン・パウル自身が自分のシニシズムの歴史的由来は承知しているのである。批評家は特にこの言葉には言及せず、自己目的化した学問追⁽¹⁾求とか、ゲーテ・シラーの古典的美学に対決するもの⁽²⁾といった視点で論じているが、本人の弁が一番穏当なようである。

ただこれらの批評家も自説の展開という「自己目的化した学問の使命」があって、やむを得ない面があり、筆者もそこで自説を展開するためにカツェンベルガーのシニシズムの背後にはキリスト教に淵源する文化的背景があることを指摘したい。ここではすでに「清潔」、「純潔」という言葉自体がキリスト教の伝統の存在を暗示していないだろうか。周知のように修道院の三つの誓いは、従順、清貧、純潔の三つである（Bd.1 S.429 参照）。精神が肉体を分離、抑圧する背景が窺われる。

すでに一度指摘したことがあるが、ジャン・パウルは『ヘスペルス』で、下手な教会音楽を褒めあげて、調子はずれの歌は、より高い精霊には、調子の整った歌よりも単調には聞こえないはずだと述べている。「不協和音というのはオイラーとズルツァーによると大きな数字で表現される音声関係である。それは不均衡のせいで我々の気に入らないのではなく、我々がそれをすぐに均一化できない能力の無さに依るものである。より高い精霊達は我々の佳調の近い関係を余りに安易、単調と見なし、これに対して我々の調子外れのより大きな関係を魅力的なもの、自分達の理解を越えないものと見なすであろう。礼拝は人間の為よりもより高い者達の名譽の為に行われるので、教会のスタイルも、より高い者達に合う音楽、つまり調子外れの音楽が作られるよう、そしてまさに我々の耳に最も忌まわしいものを神殿に最も相応しいものとして選ぶよう努めなければならない」(Bd.1 S.772)。従って下手な歌が上手と反転することになる。これが生ずるのは「より高い精霊達」を設定するからである。これと似たことがカツェンベルガーでは奇形に関して生じている。

「私は貴方が私の『奇形児考』を読まれたかどうか知らない。しかし私はその中で遠慮なく真の奇形に対する一般の無関心を難じて、まさにゴシック構成様式から外れることによって我々にまず有機的構成法則を教えてくれる生物をいかに皆が無視しているか堂々と述べたものだ。自然が偶然の衝突や課題（例えば一つの頭部に二つの肉体を有するものそれ）を立派に有機的に解決するときの方法、これは為になる。奇形は不自然なものとして存続しないと云わないで欲しい。どの奇形もとにかく自然なものに違いなかったのだ、さもないと生命や現象としてまで存続しなかったであろう。隠されたどの有機的不具合、過剰部分のためにまさに貴方や私の存続からも結局永遠性が奪われているか、我々には分かっているだろうか。すべての生命は、単に一分間の生命のものであり、永遠の法則を背後に有している。奇形物は単に一身に幾多の連邦国家の小肉体の法典を示しているにすぎない。極めて不規則な形姿であれ、極めて規則的な法則に従って形成される（不規則な規則というものはナンセンスだ）。まさにそれ故に奇形はより高度な腸占い、受身的殉教者として巧みな解剖によって、凡百の家畜の場合よりも多くの洞察を提供することになろう、せめてより良くこうした望遠鏡やオペラグラスを生命界へ向ける術を心得ていればの話であり、そしてそもそも、フォン・ニース殿、惑星のようにまさに食のとき最も精神的に輝くようなこのような珍しいガイドや予言者をより丁寧に保管しておればの話であるが」(S.128)。下手な音楽を上手なものへ変換するには「より高い精霊達」が必要であった。しかしここでは「より高い精霊達」は現世の科学者の内面に置換されており、「望遠鏡やオペラグラス」の助けを借りることになる。かくて科学者は不規則な形姿のなかに

規則的法則を解説する。少し飛躍することになるかもしれないが、キリスト教の神から、理性の神としての自然科学者が誕生しているといえるであろう。

ただジャン・パウルは多分さらに話を面白くするためであろうが、筆をすべらせて、これがカツェンベルガーを問題を含む存在にしている。「しかし誰が奇形の、これは天才同様に遺伝しないもので — というのは奇形そのものが肉体的天才であり、無比の真珠であり — 日曜日生まれの子[幸運児]ですらなく、閏日生まれの子であるからで、代わりとなろう、私は皆に聞きたい。私自身としてはこのようなものに夢中になれて、例えば私は女性の奇形児と、彼女が他に値切れないのであれば、結婚生活に入ることだろう。そしてテーオダ、おまえに隠そうとは思わないが、この件は純粹に学問的愛から生じたことであり、ちょうど『奇形児考』を書いていたからであるが、 — 私はおまえの母が身ごもっている間、亡きおまえの母に対して、立って踊る熊や猿、ちょっとした怖いもの、それに私の陳列室の貴重品を彼女から遠ざけることにさほど注意を払わなかったものだ、だって最悪の場合ただ怪物的な子供を生んで、私の陳列室に一品増やすだけであつたらうから。しかし残念ながら、とこう言いそうになったが、でも幸いにして妻は私におまえをラーヴァーターの見解の証明として贈ってくれた、つまりラーヴァーターは、妊娠中不具を最も恐れた母親は通常最も美しい子供を産むと述べているのだ」(S.128f.)。こうした傾向に対しては正当な批判がなされている。「ここから『シニカルに喜んで人間素材の実験と関わるタイプの医師』へは後一步である。ヴォルフガング・ハーリヒはこの思考を徹底させて、『ナチの時代に強制収容所の医師という最も残忍極まるものになった悪評高い医師達の職業的シニシズム』を思い出させている」とある論者⁽³⁾は述べている。しかし別な論者⁽⁴⁾は、カツェンベルガーの言動はトリスラム・シャンディーの誕生にまつわるエピソードや『親和力』に見られる妊娠時の空想に関する迷妄、迷信に対する理性化の方向を示すものであって、ジャン・パウルの言説をカント的觀念主義に抗する詩的百科全書派の営みとして理解すべきであると説いている。更に最近の日本の文庫本を覗いてみると、現在では科学者達は不規則な形姿(ミュータント)のなかに規則的法則を解説するのに成功したらしく、1984年、ホメオボックスというハエからヒトにまで共通する画期的な形態統括の塩基配列を発見したらしい(『生物学個人授業』岡田節人、南伸坊著、新潮文庫参照)。カツェンベルガーは直感的に現代の発見を予言しているともいえる。

カツェンベルガーが八本足の兎を薬店主からせしめたり、不倶戴天の敵の書評家の医師から六本指の手を巻き上げる箇所はスモレット風な茶番劇⁽⁵⁾で、特に論ずるまでもないところである。ただ書評家を懲らしめるために酔っぱらいを演ずるといふ飲酒の詩と真実は『見えないロッジ』の医師ホッペディーツェルの素面で酔いを演ずるいたずら(第十四扇形)の裏返しで、ジャン・パウルでは馴染みのものである。また六本指にジャン・パウルは愛着があつて、六本指の持ち主を媒介にして『見えないロッジ』と『ヘスペルス』の話の筋を統合しようとした痕跡があるし、『彗星』のヴォルブレは六本指で催眠術の食事を演出している。六本指は現代の発生学でもアクチュアルな問題であるが、ジャン・パウルの思弁では次のようなことに落ち着く。「ビュフォンは人間の概念が明確になったのをその指の所為にしていて — それで考えも手で解剖できるのであり — それ故六本目の指を持っている者は五分の一だけあるいは十一分の一だけより明瞭に考えるに違いない」(『ヘスペルス』Bd.1 S.629)。その他カツェンベルガーの言説の多くは「最良のシニシ

ズム」とジャン・パウル自身述べているように、女性客の響聲を買ったと述べられてはいるが、さほど奇矯なものではない。例えば次のような術学的な調子のものである。

<「メールホルン殿、今例えば食事の楽しみに対して同時に解剖学的真理の楽しみ、あるいは魂の食事を同伴させたら、嫌と思し召されるかな」。 — 「とても楽しみでございます、ドクトル殿」と彼は言った、「貴方の学的舌に私が付いていければの話ですが」。

— 「貴方はただ私の話に合わせて噛めばよろしい。つまり単に咀嚼の機能についてちょっとした学問的見取り図をお見せ致そう、この見取り図を貴方は即刻自らの機能と、生きた原像と比較して頂きたい。 — さてよろしい — 貴方は今咀嚼している。しかし御存じのように、咀嚼筋が貴方の両顎を動かしている（本来は単に下顎であるが）梃子の種類は、全く劣等なもので、つまり所謂第三の種類に当たる、即ち、重荷あるいは食物は梃子の支点から最も離れたところにあるのだ。それ故貴方は犬歯では胡桃を割ることができない、親知らずでは別だが。しかし話を進めよう。さて貴方はその皿に詰め肉を目にする。すると（今気づくだろうが）耳下腺（おおよそこのあたりだが）並びに下顎の唾液腺が起動し、遂にはステノニス道を通して詰め肉に必要な唾液を送る、それが泡立つのは貴方にしろ、他の皆にしろ、ただ広がる気体のお蔭なのだ。関税吏殿、続けて噛まれるがいい、すると更に鼻道から、それに涙腺から、ここで貴方がむさぼる限りのものを消化する希望を抱かせるに十分なもの全てが流れ出てくる。この海上勤務の後に陸上勤務が続く」> (S.275f.)。

ただ次のような話の展開は思いがけないもので、一瞬何が可笑しいのか分からないほどである。「これは反吐の不合理の一例である。しかしもっと強力な例がある。ワイン、ビール、リキュール、ブイヨンとあるが、要するに我々の口の中で我々にとって純粋で馴染みが深く、相性が良く、一日中留まっている（異物はできない）のは、その所有者が、それを吐き出したら、紅茶カップの半分も飲むことができないもの — つまり唾である。しかしこのことがまことに不合理でないとするれば、私が私の立派な同僚シュトリキウス氏を反吐が出るほどに嫌う、それも単に、彼は私に学問や努力の点で近くて、友情によってある程度私の内部の一部であるけれども、私の外部の私の椅子の横に立っているからといって、嫌うとするればそれも不合理なことではなく、理性的なこととなるう」(S.277f.)。

またカツツェンベルガーは侯爵にどんな動きが健康に良いかと問われて、動物のように四つ足で歩くことを勧めているが、これは視覚に訴える言説となっている。

<「それは多分」とドクトルは言った、「陛下がひょっとしたら足だけで歩いておられるからです。これには一部欠点があります — 」(侯爵は問い質すように彼を見つめた)「と申しますのは両手でも同時に歩いたり、動いたりする必要があるからです、私ども哺乳動物は肉体を考えますと実際四本足ですから、モスカティーがはなはだ立派に、ただ誇張して証明していますように」。 — さて彼はその件にもっと照明を当てて、示した。「いずれにせよ静脈血は苦勞して足の方へ昇っています、しかし足だけを動かして、刺激を与えれば血は更に足に鬱血します。かくて他の静脈血の循環全体にとって単に劣悪なことになります[*1]。それ故前足、あるいは腕が協力者として — 少なくとも木挽台で、あるいは織機の背後で、あるいは轆轤で腕を働かせようとは思わない高貴な人物の場合には — 足裏と同様に強く上下に揺さぶられる必要があります、殊にハラーの生理学によればすでに腕を単純に上げるだけで鼓動は何回も強まるそうですから」。 — ここでド

クトルは侯爵に医薬用の歩行を、振り子の腕を動かして、巧みに行ってみせ、駆ける馬のように太股と脛とを反対方向に前後させることになった。 — そして湯治の一行は皆遠くから侯爵を前にしてのドクトルの不可解な無遠慮な揺れ動きを眺めた > (S.272f.)

最後の文に眺める人物を配しているは『美学入門』第七十九節で触れられているように、視覚に訴えるためのジャン・パウルの技法の一つである。究極的には心身の二元論に淵源する美学であろう。

更に続けてカツェンベルガーは「演説」を勧めているが、これは座業を主とする執筆作業をジャン・パウルが長年続けていたからであろうと思われるが、現在の筆者にも身につまされる言辞となっている。

「いや陛下に提案して良いと思われませんが、陛下は天候が歩行に向いていないときには、その代わりに演説を選ばれたらよろしい、演説はより素早い酸素の吸入と窒素の吐き出しによって素晴らしく血を酸化しますから。それ故私ども教授はしばしば休暇中は、お蔭で自分を酸化したり脱炭したりする習慣になっている講義が休みとなるために病気になるります。あの立派な、私どもの時代には余りにも言及されることの少ないウンツァーも、陛下、彼の『医者』の第八十節で狂人にとって絶えず話したり歌ったりすることは運動の代わりになっていると全く正しく述べています」(S.273)。

テーオダとトイドバッハの恋は洞窟の場面等で描かれるが、ごく自然な成り行きを描いていてシニカルな面は見られない。フォン・ニースの筆名はトイドバッハであり、形式的にはよくジャン・パウルの作品で見られる双子やドッペルゲンガーが一人の娘を求める形になっている。一般にドッペルゲンガーの物語では二人の男性のそれぞれに魅力があり、従って恋の成り行きが成就しないことが多い。しかし同名であり、文学者の天才フォン・ニース、筆名トイドバッハに対して工兵[Geniekorps]隊に属する大尉トイドバッハの対立は、すでに初めから文学者がいかにがわしい存在として描かれているために勝負にならず、二人の恋は成就する。得恋者が文学者ではなく、数学者であるのは、歴史的に振り返れば自然科学の勢いを象徴するものであろう。ただシニカルな恋とはどのようなものか、カツェンベルガーが若い頃の思い出を語っていて興を添えている。娘婿のトイドバッハも数学者で、自然科学者であるから、テーオダ達の恋愛もカツェンベルガー風になってもおかしくはないのであるが、そこまでは話を作っていない。「ただ一度私は、ゲスナーの惚れた牧人、最上級生として、病気のときは静脈すら脈打つようなもので、ヘボ試作を試みたかもしれない、愚かな娘を前にしてな — その女神は今どこでその雌山羊の乳を搾っているか知らない。 — 私はこの娘にすでにそこに広がっていた美しい自然を描いて、こう尋ねたものだ。御覧、ズーゼ、すべてが私ども同様に私どもの前で花咲いていないか。ゼラニウムに大きな蒲公英、カミレ、芍薬、アルニカがりんぼくの頂や梨の梢に至るまで花咲いていないか。至る所で花の花粉が舞って結ばれており、今この花々をあなたの家畜が食らっている」(S.107f.)。カツェンベルガーはその言動に奇矯、過激な部分を見せはするが、一面良き市民であることは、結局名親を承知することからも窺われる。名はアマンドゥス(Amandus 愛するに値する)なのである。しかし姓はカツェンベルガーでこれはドイツ人に見られない姓ではないが、作品中では「猫殺し」(Katzenwürger S.111)と揶揄されている。「好奇心は猫をも殺す」というイギリスの諺があるが、これを踏まえているかは判然としない。

カツェンベルガー自身自分の結婚についてこう述べている。現実的な理由が述べられてはいるが、因果律は単純なものではなく、単純に恋愛を否定しているものではない。「自分もかつて独身者として結婚のことを考え、当時の流行に従って崇拜した — 当時は敬慕と言ったものだ、 — しかし突然厳しい数学的解剖学的陣営から恋情の幼稚園に入らなければならなかった男にとっては当時鮭のような思いがしたものだ、鮭は春に、産卵するために塩分の大洋から真水の河川に泳いで来なければならないのだ。その上当時はまだより良い時代であったと言えるだろう — 当時はパイプの蓋なしに、愛の燃えるパイプから吸うことを警察が許さなかった — 馬車や地下室で所謂愛について話すことはなく、家政や、世帯を構えること、結婚式の日取りを決めることについて話したものだ。それに例えば自分としては白状すると、吸い取られたこぶきこがねで去られた許嫁の許で真率な言い回しでこう自分のプロポーズを述べる他には羞恥心のせいでできなかった、つまりまず自分はピラで産科医として身を立てたいと思っているが、しかし若い男達は結婚していない限り、めったにお呼びがかからないし、はやらないことを残念ながら承知している、と」(S.118f.)。一方テーオダの結婚に関しては単に愛について語られるばかりでなく、トイドバッハの財産状態を調べるという現実的なことも話題にされている。

以上のように『カツェンベルガーの湯治旅行』は全般に啓蒙的語りの支配する物語であるが、テーオダとトイドバッハの恋に関しては抒情的慰謝の語りも見られる。帰りの馬車の中での二人の心は次のように描写されている。「何と人生は、木々や眠れる村々は飛び去っていったことが、ただ小夜啼鳥の個々の音色が二人の後を追い、二人の魂を真似て鳴いた。テーオダの心は震えたが、がらがら進む馬車の下地面と共に喜んで震えていた。彼女は相変わらず、洞窟の音楽を聞き続けているかのように思われた、至る所で世界が反響した。そして最後には夜の酩酊の中で、あたかもまた、二人の人生が決することになった岩の壁の側に恋人と共に立っているかのように思われた。 — 村々や町々、地上の喧噪は消え去った、ただ星々や山々のみが愛には残っていた。 — 世界は二人には永遠に見え、星々は昇るのみで、一つも落ちなかった。 — 遂に愛の星が東の空に小さな明るくきらめく月のように昇った、曙光が二人に射し込んできた、そして太陽が燃える薔薇色の中へ進入してきた。 — 二人が互いを見いだした背後の山々の上では虹が高く天にアーチを描いていた。かくて二人は着いた、魂は互いの中にくずおれて、夜のほの白い光を日中の光輝へ引き込みながら、二人の視線は夢に酔っていた」(S.288)。ある論者は『カツェンベルガー』の語りを「諷刺」と「感傷」の混在する諧謔的な語りであり、また脱線と比喩を特徴とするとまとめている。

しかし最後にジャン・パウルはカツェンベルガーのことを悪魔と謎めいた形容をしている。「彼が表面上の偽装の中に真の偽装を隠していなかったか、本来地下の富を口実にして地上の富を調べてみたか、これは明敏なボーナ他には多分誰も気づかなかつたであろう。代わりに小部屋は敬虔な愛の勝利する教会、踊る魔法の喜びのプロッケンの山頂となった。カツェンベルガー本人も魔女で一杯のこのヴァルプルギウスの夜、彼の原像(悪魔)よりも立派に踊りの輪の中のプロッケンの主人公を演じていた。」(S.308)。娘やボーナをも魔女と言っているのであるから、悪魔もたいして否定的な意味はないのであろう。この悪魔の解釈に関しては次の『美学入門』からのジャン・パウルの言が参考となるかもしれない。「古代人は、余りに生を楽しんだので、ユーモアのいまく

生の軽蔑には適しなかった。昔のドイツの茶番劇で、通例悪魔が道化であった、ということとは、この下敷となっているまじめさの現れである。フランスの茶番劇にさえも、悪魔大活劇、すなわち、四人の悪魔から成る道化四国同盟が現れる。注目に値する思いつきではある。神の世界と正反対な世界としての悪魔、偉大な普遍の影としての悪魔、そして、それゆえにこそ発光体の輪郭をくっきりとさせる悪魔、 — この悪魔こそ最大のユーモリストと気まぐれ男を兼ねているように、私には思われてならない」(古見日嘉訳 第三十三節 Bd.5. S.129f)。キリスト教の文化から発生した自然科学者の素性を的確に暗示しているのではなからうか。もっとも悪魔といえばキリスト教に関係するのは自明なことであるが。本来物語の中で神の位置にいるのは全知的 (auktorial) な作者である。しかし全知的作者の問題はフォン・ニースという虚栄心の強い滑稽な作者の < 似姿 > で片付けられてしまっている。しかし本を書く文化という問題は残っている。この作品に登場する人物は文学者のフォン・ニースは言うまでもなく、解剖学者のカッツェンベルガーも三冊の専門書を書いており、トイドバッハも測量関係の書物を書いている。執筆者についてテーオダが意味深なことを書いている。「執筆者は余り気にかけていない方がいいのではないかしら。私どもの神様が十分に執筆者というわけで、だって神様は執筆の民をすべて自らお創りになったのだから」(S.194)。不立文字の言葉のある文化とは出自が違ふと覚悟すべきである⁽⁷⁾う。

注

(1) 「『 どの国家が奇形の納入に報償を設定したろうか、いわんや奇形の創出に対して (J.P 128) 』というカッツェンベルガーの嘆きには自然科学者の価値体系の根本的ずれが明らかになっており、このずれは経過するにつれて、初め人間愛の欲求の促進に役立っていた学問的収集が自己目的へと退化している」(S.22) 「カッツェンベルガーでは主観性はそれを基礎づける一般性から離れている、個人の生産力はその目的の眺望を奪われており、同時に天才概念の実体は壊されている。取り出すべき見本に関して専ら道具的に用いられる恣意が目的となり、部分性の自立を目指す反美学の計画がはっきりと認められる」(S.30) Fritz, Horst: Instrumentelle Vernunft als Gegenstand von Literatur. Wilhelm Fink Verlag . 1982

(2) 「これはある格言でこう述べているゲーテの見解と何とかけ離れたものであろうか。美は秘められた自然の法則の発現であり、これらの法則はこの美の出現なしには永遠に隠されていたであろうものである、と。それにこう規定したカントのテーゼから何と遠くにあることだろうか。さて私はこう言う、美は倫理的なものの象徴である、と」(S.21)。

「美、善、真の三位、シラーの楽天主義を可能にした前提はもはやジャン・パウルには存在しない。彼にとってこれらの偉大なものは分離している。一方の側に真理があり、別の側に美と善とがある」(S.79)。

Schaer, Michel: Ex negativo. "Dr. Katzenbergers Badreise" als Beitrag Jean Pauls zur ästhetischen Theorie. Vandenhoeck & Ruprecht. 1983.

もっとも Schaer がこの論文で強調しているのはカッツェンベルガーの有する両義性である。「両義性はこの作品のすべてに見られる」(S.96)。

(3) Eckardt, Jo-Jacqueline: Angriff, Rückzug und Zuversicht. Peter Lang. 1989. S.70.

(4) Schäfer, Armin:Jean Pauls monströses Schreiben

Jahrbuch der Jean Paul Gesellschaft 2002. S.216-234.

(5) 喧嘩は単にスモレットの影響ばかりでなく、解剖学者の実像のようである。

「カツェンベルガーの奇形に対する時代特有の熱狂、その『解剖学的病理学的収集への具体化』、それに由来する(一般的な)収集癖、そして最後に医師や解剖学教授の『学問的論争癖』は - Arteltによると - 正確に『十八世紀の医学の全く一般的な特徴』を指摘している」。

Erb, Andreas:Schreib-Arbeit Deutscher Universitäts Verlag. 1996. S.154.

(6) Japp,Uwe:Die narrative Instanz des Humoristen in Dr. Katzenbergers Badreise.

Jahrbuch der Jean Paul Gesellschaft 2000/2001 S.304

(7) 養老孟司は科学の誕生の理由の一つにアルファベットを挙げている。「西洋と東洋とで、なぜ、そういう違いができたのか。一つの理由は、西洋のことばはアルファベットで書くからである」(ちくま文庫『解剖学教室へようこそ』一一二頁)。

『カツェンベルガー』では多くの付録がついている。個人的には「眠り込むためのテクニック」が一番身につまされ、入眠という努力解除の儀式に努力を傾けるジャン・パウルの筆法が笑いを誘っているが、ここではよく論じられることの多い「シャルlotte・コルデについて」触れてみたい。この論考では、マラー暗殺者のコルデの命日忌にジャン・パウルがある伯爵に招かれコルデの追悼を述べるという設定になっており、その場に現実的政治家の「長官」も出席し、半ば討論という形で進行する体裁になっている。この現実的長官との遣り取りが前半で、後半になると、雷雨のため長官が去り、後は一方的にコルデ賛美に終わっている。論者の多くは、この長官の後半の不在が象徴しているように、革命における理論と実践、目的と手段の統合はジャン・パウルにおいても失敗し、観念的なものにとどまっていると指摘している。長官は「マラーの殺害者は思い誤り、目的は手段を高めることはできないにもかかわらず、同時に目的においても手段においても失敗したのです」(Bd.6 S.335)と述べている、つまりマラーではなく、ロベスピエールやダントンを殺すべきで、もっといいのは殺さないのがいい、事態を悪化させるだけだからと述べているのだが、これに対し、ジャン・パウルは「運命が行為に対する純粋な関係を分け与えるのは、ほんのわずかな幸福な者たちだけです、意図のどんな善意も十分ではありません、なぜなら我々は、結果を保証しなくても、結果の計算を - それはしばしば無限なもの計算でもあるのですが、保証しなければならないからです」(Bd.6 S.338)とかなりお手上げの状態である。「政治的計算」に対するジャン・パウルの対処はクルト・ヴェルフェルの注釈を引用すると次のようなことになる。「ジャン・パウルがここで表明された議論の範囲内で、善良な意志の意図する目的の内実に関して話すときの流儀は明らかに諦念に刻印されている。『要するに、我々は実際に何かを望みます。我々は神の都市に住むことだけでなく、それを大きくすることも望むのです』と述べられる(Bd.6 S.339)しかしこの保証と同時にジャン・パウルは或る越えがたい柵に達しているように見える。つまり目的の確実性とそれを実現するための諸手段の不確実性との間の柵である。必然的に政治的な - 実践をおこなうとき現実の中でこれらの手段がぶつかるであろう疑問に対して答えるのは或る溜め息である。『何を避けるべきかは、悪魔でも知っています。しかし何

をなすべきか知っているのは、ただ天使だけです』(Bd.6 S.339)。そのすぐ後もう一度言われる。『単なる法よりも、つまり不正を行わないという法 - 首尾一貫した道徳はそこに限定されるものですが - この法よりも高いものが求めるべきものとして存在するにちがいありません - しかしこのより高いものは、刺激と規定の無限性においては、道徳という定規によっては計測することも、直線にすることもできません、それはちょうどラファエロの人物像や生きた人物像が数学的な図形によってそうできないのと同じなのです』(Bd.6 S.340)。そこで、実証的に存在しているものを越えていこうとする理想的志操は、どのような<より高度な><行為>によってこれを実現するかという間に直面して絶望することになる。このような命題に直面すると、ジャン・パウルはかつて、政治的プログラムといったものを有していると述べて、その長編小説をこのプログラムを告知するものとして書こうとしたという仮説は全く根拠のないことが明らかである。(Jean Paul-Studien S.223f.)

Beate Greislerも長官の不在を指摘している。「かくてテキストの経過の中で音もなく長官が消えていくことによって確かに一方では人間の中の衝動的なもの、物質的な利害の必須の欠如が自由の条件として強調されることになるが、他方ではこの不在はまた信奉者達の孤立、伯爵の庭園の孤絶をも明らかにしている。現実に根ざした自由の実現はここでは単にかすかに伯爵と詩人の同盟の中に暗示されており、二人が一人に融合すれば啓蒙的君主ということになる。/ この『半・談話』とマラー殺害の解釈はドイツ市民階級に広まった立場を明らかにしている、つまり啓蒙主義の自由の理念を政治的革命という形で実行するのではなく、私的な倫理的な領域に移して、<上から>の変革を期待するという立場である。<上から>とは国家政治的には啓蒙的な君主への期待を示しており、市民階級の主体に関連付けると倫理と精神の領域で自由への要求を代償的に解消するというのである」(Beate Greisler:Charlotte Corday - Die Mörderin des Jean Paul Marat 1992 S.64)

以上二人の論者の見解を紹介したが、これらは注意深く長官の不在を読み解いた論考であって、この不在を気につけずに読むと、現在ではジハード容認、テロ容認と読み間違えそうな筆遣いになっている。一方的にマラーを悪役に仕立てて、コルデの純粋さを強調しているからである。確かにこの論考に洗脳されたと思いきザントが劇作家のコツェブーを刺し殺す事件が起き(一八一九年)ジャン・パウルはこの事件に対して注3で生命を「行為のせいではなく意見のせいで奪った」、「羽ペンの代わりに短剣」を握っている、遺憾であると弁明している。またコルデ論ではマインツの革命家アーダム・ルクスも称賛されているが、後にジャン・パウルに対してルクスの娘が彼を慕う手紙を送るという出来事が生じている。色々な意味でこのコルデ論は興味深いものである。

『伝記の楽しみ』(一七九六年)

ジャン・パウルは大きな女神像の頭の中で執筆しているという設定である。そこで語られるのは、フランス革命で父を処刑された貴族の娘と、革命に参じたイギリスの貴公子との恋物語である。この恋が成就しているかは疑わしい。というのはこの貴公子が自分を愛していないのであれば、その印を見せよと言ったのに対して、娘は接吻するからである。その他脱線部分には脱線の是非を問かける著者と読者の模擬裁判や下層階級の恋物語、或る乞食の死に対する弔辞等が記されている。

まず、物語の部分ではリズムーという貴公子とアドリーヌという娘の恋物語が語られている。印象的なのは二つの木霊の場面である。最初の木霊の場面では二人は魂の和合に成功し、第二の木霊の場面では失敗しているように見える。まず第一のジュヌテの木霊はこう記されている。「彼らの散策の意図は、極めて珍しい木霊を聞くということで、この木霊は楽長として山の聖書台に置かれた旋律を演奏するのであった。その珍しい点、そこでは歌い手はただ自分の声を聞くだけであるが、しかし聞き手はその声を聞かず、その声の反響だけを、それもしばしば一つの声ではなく二つの声を、すべて別様に、あるときは間近に、あるときは遠くに聞くという点にあった」(Bd.4 S.311)。第二の木霊の舞台はスコットランドのリズムーの領地である。「彼は彼女を木霊の白鳥の歌でびっくりさせようと思って、素敵なた方という口実の下、湖畔の所謂水辺の家に行くことを提案した」(Bd.4 S.334)。

この二つの場面に対しては、Gunner Och が最初に詳しい解釈を示しているので、それを紹介しておきたい。「マックス・コメレルの解釈がこの[第一の]場面の意味を読み解いている。『木霊の焦点は二人の魂の相互理解の偉大の地上的例外を意味している』(コメレル『ジャン・パウル』S.144)。それにコメレルはジャン・パウル自身が次のように述べてアレゴリー的な解釈を提示していることを気づかせている。『しかし自分の魂がその木霊をアドリーヌの魂の中で聞き取る地点を探すのにリズムーがほとんどいつも失敗していたように、二人は物理的木霊の地点をも探しだせなかった』(Bd4.S.311)。しかしコメレルはこの場面の豊かな関連をまだ完全に汲み尽くしておない。注目すべきは、ジャン・パウルが物質的精神の木霊を聞き取るための条件としているものである。それは、忘却、瞬間的な無反省状態の発生である。歌の媒体へと変換された言葉がその意図的な性格を失ったとき、つまり反響となるとか、反響として聞き取られる性格を失ったとき、それはコミュニケーションとなれるのである。それと知らずにアドリーヌは自分の愛を告白できるのであり、<分別の白昼の光>の中では単なる誤解にすぎないものから、了解が生じ得るのである。/ ジャン・パウルの第二の木霊の発明はこれとは正確に反対なものである。愛する二人は過度な反省によってすれ違う。リズムーはその<計画癖>によってアドリーヌとの溝に橋を架けようとする。彼は全く意図的に、自分達を結びつけた第一の木霊を思い出させることになる或る木霊を演出する。しかしこのリズムーの過剰な反省に正確に対応するこの反響の反響は、アドリーヌにとっては単に自分の死んだ両親の声を思い出させるだけである。悲しみに圧倒されて、アドリーヌは自分の母親が自分達の愛に対して有していた関与を思い出す。この暗示を理解しないリズムーははっきり告白するように迫る。結局「彼女の述べたことは、彼女の胸に優しく迫ってきた例の母親の説得のことで、ジュヌテの木霊が彼女の心を第二の心につないだかの日にリズムーにとって有利なすべての秘密を彼女から聞き出したというか彼女に植え付けたのであった。(中略)しかし乙女らしい口にかかると、彼女の魂の夕方の帰依は大方 — 朝の話し合いのせいであるかのように聞こえた」(Bd.4.340)。従って論証的会話はいまやゆかず、リズムーは錯覚して、彼女は単に死んだ母親に対する忠誠心から自分を愛しているにすぎないと信じてしまう」(Gunner Och:Der Körper als Zeichen 1985 S.147f.)

こうした表面上の言葉にこだわってしまう悲劇はシラーの『たくみと恋』にも見られるが、そして『伝記の楽しみ』の物語部分は「二人の疲れ切った者達が悲劇と影絵芝居の舞

台を去ったとき」という言葉が使われて終わっているものの、全体の流れでは二人の恋が成就するのではないかと予感させないでもない。事実ペーレントによればジャン・パウルはこの作品の続きを考えていたらしく、それによると二人の結婚で終わる予定であったらしい。しかしまたこの作品の付録を参照してみると、ジャン・パウルがエーファという娘とさえない学校教師とを強引に結婚させる話が挿入されている。その際、次のようなまことに明瞭な洞察がなされている。「こうした優しい娘達にはいつもおぼろな諾か否かを
— 彼女達の明暗法を — そのままにしておかなくてはならない。彼女達から明確な返事を無理に手に入れようとする者は、自分の願望にも彼女達の願望にも同時に反する返事で追い返されてしまう」(Bd.4.S.401)。過度な反省を有する青年貴族はそれ故悲劇的結末を迎え、さえない学校教師は結婚の喜劇的結末を迎えているわけで、全体のバランスは取れている作品とみなすことができよう。

『自伝』(死後出版一八二六年)

最近出版された Helmut Pfotenhauer 編集 のジャン・パウルの『人生の書 Lebenserschreibung』(2004年)では『推定伝記』(1799年)と『自伝』その他ジャン・パウルの自叙伝に関連する草稿が一緒にまとめられて出版されている。古くはレクラム文庫も『推定伝記』と『自伝』を一緒に出版している。『推定伝記』が未来に関する虚構を交えた真実の書であるとするれば、『自伝』はジャン・パウルの場合それを過去に応用したものと解釈されるからであろう。もとより自伝では虚構の事実が語られるわけではないが、事実の選択、解釈は当然言語を経てなされる以上、虚構の部分を含むというのがその理由であろう。「人生の真実という嘘」と簡潔にラルフ・ジーモンは述べている。(Ralf Simon: Zwei Studien über Autobiographik. Jahrbuch der Jean Paul Gesellschaft 1994 S.116)

このラルフ・ジーモンが上述の論考の中でジャン・パウルの自伝演出に関して注目しているのは次の三点である。以下ジーモンの説を紹介する。

- 1) 思い出の彼方にある出来事の象徴性、2) [主人公の]名前の交替、3) Apostrophe
- まず1)について。「五ヵ月の赤ん坊だった私」は祖父の「臨終の床へ差し出され、そして祖父はその手を私の頭の上に置いてくれたのです — 敬虔なお祖父さん。運命が私を暗黒な時期から光明の時期へと導いてくれたときに、私はしばしば、冷たくなっていく中で祝福して下さったあなたの手のことを思ったものです」(Bd.6 S.1042)。記憶の彼方にある出来事に象徴性を探すこの流儀は、人生を連続的に説明するものではなく、非連続を導入するものである。幼年時代はジャン・パウルにとって或る独自の記憶を持つものである。「もし現在の歴史研究家についての未来の歴史研究家の誰もが、他のどんな幼年時代の中にも撒き散らされているような破片を拾い集めて、そこから何か特別なものを組み立てようとするならば、実際私には極めて滑稽に見えるであります」(Bd.6 S.1059)。
- 2) 主人公の名前の交替。主人公はパウルと呼ばれたり、フリッツ、主人公、ハンス・パウル、牧師の息子、教授と呼ばれたりする。これはこの自伝が或る自然に生成する場に関心があるのではなく、その都度その場にに応じて語っていることを示している。この語りは語りとは別個に存在する現実という虚構を砕いている。
- 3) Apostrophe (頓呼法、途中で急転し荘重な調子で呼びかける表現法)。さらに時間軸のこうした非連続の地平に対して屹立する語りの局面がある。「私は、自分の中で起こ

った未だ誰にも話したことの無い現象を決して忘れは致しません。そのとき、私は自意識の誕生に立ち会ったのであり、これについては場所と時間を挙げることができます。或る朝、ほんの小さな子供だった私は、玄関の戸口に立って、左手の薪置場の方を眺めていました。そのとき突然「ぼくは、ぼくじしんなのだ [Ich bin ein Ich]」という内部の顔が、一条の稲妻のように天から私めがけて射し込み、それ以来その光は輝きながら止まったのです。そのとき私の自我は、初めてそして永遠に、自分自身の姿を見たのでした」(Bd.6. S.1077)。これは語りの秩序から外れ、それに屹立している。意識の超越論的歴史に属する契機としてある。こうした永遠の契機には、他に挙げると、「今でも彼は或る夏の日を思い出します。その日の帰路の二時頃、彼がさんさんと照り映える丘陵や、一面に棚引く麦穂の波とその上をさっと過ぎって行く雲の影を眺めていたとき、不意に彼はそれまで経験したことの無い漠然とした憧憬におそわれました。それはほとんど締め付けられるような苦痛と淡い喜びの入り混じったものであり、何か覚えのない願望でした。それはすでに、人生に隠された天の財宝に憧れる完全な人間でありました」(Bd.6 S.107) それに加えて最初の接吻である。「それはたった一粒の瞬刻の真珠であり、かつて存在したことがなく、二度と再び戻ってこないものであったとしか私には言うことができません。それは切ない過去と未来の夢が、のこらず一瞬の中にひとまとめに圧縮され - そして閉じた瞼の裏の闇の中で、生命の花火が一瞬だけ閃き、そして消え去ったのでした」(Bd.6. S.1099)。

以上はジーモンの説である。このジーモンの言う Apostrophe の用法を『推定伝記』に探せば、次のような箇所がまことに印象的である。

「私はウィーン製のガラスの箱に聖なる遺体として運びこまれていました、この遺体はあるときは聖パウロとされたり、あるときは本や知識のパトロンである聖ラウレンツィアとされていました - それから私は(全く夢にふさわしく、乱暴な流儀で)自らの銅版画に変身し、その前には時間が立っていて、時間は背後のインク壺にペンを浸して、額に水平な線を数本、つまり皺を引きました - 突然ある骸骨が覆いを掛けられた窓間鏡の前に立ったのですが、その鏡の前には覆いのない鏡が向かい合って掛かっていました - 突然絹の覆いが取り除かれました - そして両鏡は互いに果てしなく遡及して行く形姿の列を写しました、そしてそれぞれの無限が自らと相手の無限とを繰り返しました - この二つの薄暗い、消えて行く列は後世と前世とを模しているように見えました - - これは何だったのでしょう。 - 夢でした」(Bd.4 S.1071)。

以下レジюме

Die Geburt des Naturwissenschaftlers

— Jean Pauls Dr. Katzenbergers Badereise —

Norimi Tsuneyoshi

Jean Paul führt bei der Begründung eines Handelns zwar stets verschiedene Gründe an, aber keine, die außerhalb eines logischen Kausalzusammenhanges ständen. Diese aufklärerische Haltung zeigt, dass seine Weltsicht der seiner zeitgenössischen Leser entsprach. Den Zynismus Katzenbergers kommentiert er mit den Worten "wir altjüngferlichen Deutschen"(Bd.6.S.83).

Indem Jean Paul von der Existenz "höherer Geister" ausgeht, wird es ihm möglich, sich über menschliche Werke lustig zu machen und seinen ihm eigentümlichen Humor auszudrücken. Im Hesperus lobt er z.B. auf satirische Weise die abscheuliche Kirchenmusik auf dem Land und meint (Bd.1.S.772): "Höhere Geister würden die nahen Verhältnisse unserer Wohllaute zu leicht und eintönig, hingegen die größern unserer Mißtöne reizend und nicht über ihre Fassung finden." Diese höheren Geister haben m. E. ihren Ursprung in der transzendentalen christlichen Religion. Ähnlich verhält es sich bei Katzenbergers Ausführungen zu "Missgeburten"(Bd.6.S.128): "Alles Leben, auch nur einer Minute, hat ewige Gesetze hinter sich; und ein Monstrum ist bloß ein Gesetzbuch mehrerer föderativen Staatkörperchen auf einmal; auch die unregelmäßigste Gestalt bildet sich nach den regelmäßigsten Gesetzen." Nach Katzenberger entdeckt der Naturwissenschaftler dieses Gesetz mit Hilfe von "Sehröhre und Operngucker". Dabei durchschaut ein höherer Geist des Naturwissenschaftlers die Regelmäßigkeit der Unregelmäßigkeit. Dieser höhere Geist wird hier innerlich versetzt, d.h., der Naturwissenschaftler wird Gott. Katzenbergers Interesse nahm die moderne Entwicklung der Biologie vorweg, die 1984 das bahnbrechende Gesetz von der Homeobox in der Mißgeburt von Fliegen entdeckt hat. In diesem Sinne bewirkt die Postulierung eines höheren der christlichen Religion entstammenden Geistes die Geburt des modernen Naturwissenschaftlers, und zwar mit allen positiven und negativen Konsequenzen. Im Katzenberger kann man zum einen bereits den Keim des Zynismus der KZ-Ärzte der Nazizeit und zum andern die immer noch leuchtende Tradition der Aufklärung erkennen.

Bei Jean Paul ist der auktoriale Autor eigentlich Gott, aber das Problem des auktorialen Ich bleibt hinter der lächerlichen Gestalt des Dichters Nieß verborgen. Im Katzenberger wird die Eitelkeit des Dichters jedoch vollkommen entlarvt und das Doppelgängermotiv, d.h., der Narzißmus des schreibenden Ich, parodiert. Außer dem Dichter Nieß schreiben die Charaktere des Romans alle möglichen Sorten von Texten. So finden sich neben den dichterischen Texten von Nieß auch wissenschaftliche von Katzenberger und Theodobach. Theoda meint dazu (Bd.6.S.194):"Man sollte weniger nach einem Schreiber fragen, da man ja an unserm Herrgott genug hätte, der doch das ganze Schreiber-Volk selber geschaffen." Das ist weit von uns Japanern, die wir in der Tradition des Zen stehen, der nicht an Worten hängt.